

特別編 人のとなりに

山本 實彦 (享年97)
1885年(生)〜1982年(没)



「人のとなりに」では、これまで、原則、薩摩川内市の方を紹介してきましたが、コロナ禍により取材が困難であることから、今回は特別に「薩摩川内市ゆかりの人」というコンセプトから、歴史上の人物、山本實彦を紹介いたします。

さまざまな苦難を抱えながら不屈の精神で乗り越え、出版社「改造社」の設立や、衆議院議員として、川内川水害対策に尽力した「百難克服の人」の思いに寄り添います。

「人のとなりに」とは…
文字通り、その人の隣にいて、思いに寄り添うことや人柄を表す言葉「人とたり」をイメージした新コーナーで、人物や活動の紹介だけでなく、その人の思いにスポットを当てることを目的としています。

貧しい家庭に生まれて

明治18年、本市の東大小路町に生まれた山本實彦は、苦しい家計と幼い弟たちと妹を気遣いながら、勉学に励み、亀山小学校を卒業後、川内中学校(現川内高校)へ進学しました。

成績優秀な実彦ではありましたが、日々困窮する家計と家族のことで、ついに退学し、代用教員の職を沖繩に得ると15歳の年に郷里を後にします。

しかし、進学の希望を捨てられずにいた実彦は、教え子たちに「人には天職がある、人は勇気に生きねばならぬ、希望に生きねばならぬ」などの言葉を残して、退職してしまいました。

実彦が教壇に立ったのは、わずか3年ほどではありましたが、「教えられた内容が脳裏に刻み込まれている」という教え子の言葉には、熱心な教育者であったことがうかがい知れ、実彦が沖繩を去る際には、全校生徒が泣いて別れを惜しんだといえます。

新聞記者としての道

退職後、上京した実彦は、屋間には労働をしながら大学の夜間部に通います。

大学で法律を学んだのち、22歳でやまと新聞社へ入社した実彦は、故郷川内の可愛山陵の別名「神亀山」と母校「亀山小学校」にちなんだ「亀城」という筆

名で政治評論、寄稿文などを執筆しました。特に実彦の書く人物月旦(人物評のこと)は評判だったといえます。

25歳の時、一時「門司新報」の主筆を務めた後、再びやまと新聞社に戻ると翌年、英国王の戴冠式の取材のためロンドンに派遣されます。そして、ロンドンに在ること1年、英国生活の中で培った国際的な感覚と人脈がこの後生かされることになるのです。



20代の頃の實彦

政治家への道

政治家の道を目指した実彦は、明治45年、27歳の時に、東京市議会議員麻布区に当選。政治家として活動を続ける一方、大正4年、30歳の時には、東京毎日新聞社の社長となるなど、経営者という肩書を持つようになりました。

またこの年、衆議院議員総選挙への出馬を計画しましたが、選挙準備中に台湾での新聞発行に関する詐欺容疑で台湾総督府に検挙、拘留されてしまいました。

その後、無罪となりましたが、国政への初挑戦は断念せざるを得ませんでした。

5年後、66歳の時にようやく追放は解除され、次の出馬準備に取り掛かりますが、選挙に備えて行った胃潰瘍の手術の経過が思わしくなく、昭和27年7月1日、山本實彦は、67歳でその生涯に幕を閉じました。そしてその3年後には、総合雑誌「改造」も終刊となりました。

時を超え、つなぐ思い

葬儀は、7月5日に行われ、政治家や文士、学者らが多数参加しました。また、東京での葬儀に合わせて地元川内でも「山本先生追悼法会」が催され、多くの人が実彦を悼みました。

その後、昭和29年には、実彦が通った亀山小学校に、信条としていた「百難克服」と直筆の文字が刻まれた「百難克服の碑」が建立されました。

時を経て、平成30年、実彦の遺徳をしのぶ有志が山本實彦顕彰会を設立。令和2年には、その顕彰委員会により募金活動などを経て、太平橋上流右岸側に、実彦が愛した故郷を見守るように、銅像が建立されました。

故郷を愛し、故郷のために尽力した山本實彦の功績と思いは、今も脈々と受け継がれています。

出典：「山本實彦クロニクル」
「川内ぼっけもん列伝」、川内市史(下巻)など

総合雑誌「改造」発刊

第1次世界大戦以降、新しい政治思想や社会思想を求める時代の要請に応じるように、実彦は、大正8年、改造社を設立し、総合雑誌「改造」を創刊しました。

「改造」は、多くの新人作家が見出し、林芙美子や火野葦平などのベストセラー作家を生み出す傍ら、里見弴や志賀直哉などの著名な作家が寄稿し、実彦は、出版界・言論界をリードする改造社社長としてその名を知られる存在となりました。それは「山本改造」という異名まで作られるほどでした。

また、「改造」の出版だけでなく、社長としての実彦は、ジャーナリストとしての才覚や経験を生かして次々に画期的な企画を実行していきました。

特に、1冊1円で売り出した「現代日本文学全集」(円本)は、日本出版界の革命ともいわれ、日本空前の全集ブームを生み出しました。



「改造」第4巻第12号
大正11年12月号

山本實彦ゆかりの地へ

ここでは、山本實彦ゆかりの地を巡ってみたいと思います。



亀山小学校の「百難克服の碑」



天大橋近く、東大小路町にある山本實彦生誕の地



川内川に架かる太平橋近くに佇む山本實彦の銅像

アインシュタインの招聘

實彦は、日本に招聘したイギリスの哲学者バートランド・ラッセルから「相対性理論」で知られる「アインシュタイン」の名を聞くと、アインシュタインを日本に招聘することを本気で考えました。

そして、国内の哲学者や物理学者の元へ足を運び、アインシュタインや相対性理論に関する意見を聞きながら、アインシュタインの招聘に力を注いだのです。

当時、帝大理科大学の長岡半太郎博士とのやりとりが次のように残されています。

長岡「相対性理論が本当に分かる者は日本に数えるほどしかない。その少数のためにアインシュタインを招聘するというのはどうかあ」

實彦「たとえ、一人や二人でも三人でもいいじゃないか。アインシュタインのような学者を日本に招聘して、その風貌に接するだけでも日本の科学界に大きな刺激を与えることになるんじゃないか」

当時、各国から要請が多かったアインシュタインでしたが、實彦からの要請に感じ、日本への訪問を決意。大正11年11月、アインシュタインが東京駅に降りると、数万人がプラットホームや駅前広場に集まっていた。



46歳頃の山本實彦



晩年の山本實彦